み国が来ますように
THY KINGDOM COME

祈りのしおり

2024年5月9日（昇天日）～5月19日（聖霊降臨日）

発行 日本聖公会管区事務所
2024年4月1日

あなたの霊によって私たちを新たにしてください

＋ ---------- ＋

『Thy Kingdom Come（み国が来ますように）』は、昇天日から聖霊降臨日にかけて行われる、世界的な運動に付けられたタイトルです。この運動は、2016 年にイギリス国教会に向けて発せられたカンタベリー大主教とヨーク大主教の呼びかけによって始められ、世界的な運動に成長しています。そして、『み国が来ますように』を祈るすべての人々がイエスさまとの交わりを深め、イエスさまの証人となるための自信を新たにし、他の人をイエスさまのもとに導くことを目的とします。

イエスさまは昇天する前に、『あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、私の証人となる（使徒言行録 1：8）』と言われ、弟子たちは、『心を合わせて、ひたすら祈りをしてい（同 1：14）』ました。このことを手本にして、わたしたちもこの期間に祈りに励むわけです。

お祈りの期間は昇天日（5 月 9 日）から聖霊降臨日（5 月 19 日）までの 11 日です。具体的には、クリスチャンに導きたい家族、友人、知人 5 名を選び、しおりに名前を記し、その 5 人のために 11 日間祈っていきます。

日本聖公会は、この運動に 2020 年から参加してきました。今年度は、新たな試みとして、各日のテーマ（昇天日、愛するなど）

は、英語版（2023 年）から引用しました。しかし、聖書箇所、み言葉の解説、祈りなどは各教区主教と管区事務所総主事が担当して作成しました。

昇天日と聖霊降臨日の間の、希望に満ちた待望と祈りの日々の中で、私たちがみな、聖霊によって刷新され、キリストにあって新たにされますように。

日本聖公会主教会

Thy Kingdom come のウェブページ
日本語のページも用意されています。
祈りの登録や各種資料も準備されています。
https://www.thykingdomcome.global/

以下に、あなたがこの期間中に祈りに覚えたい人たちの名前を書いてください。そして、神さまがそれらの人々の人生や生活を変えくださるように祈りましょう。

私が覚える５人は…

1. _____

2. _____

3. _____

4. _____

5. _____

The Prayer for Thy Kingdom Come

「み国が来ますように」の祈り

全能の神よ、あなたは天に昇ったあなたのみ子によって、み国の福音を宣べ伝えるようにと、私たちをこの世に送り出されました。どうかあなたの霊によって私たちにひらめきを与え、私たちの心にあなたの愛を灯してください。そして、あなたの言葉を聞くすべての人が、あなたのもとに集えますように、主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン

み言葉

それから、イエスは言われた。「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。主イエスは、弟子たちに話した後、天に上げられ、神の右に座られた。弟子たちは出て行って、至るところで福音を宣べ伝えた。主も弟子たちと共に働き、彼らの語る言葉にしるしを伴わせることによって、その言葉を確かなものとされた。

（マルコ 16：15、19～20）

イエスさまが天に昇られることなく地上で一緒にいてくだされば、弟子たちはどれほど喜びにあふれ、安心できたことでしょう。けれども、そのことはともすればイエスさまを自分たちだけで独り占めにし、イエスさまを限られた空間に閉じ込めることにもなりかねませんでした。

しかし、肝心のイエスさまは限られた人たちの専有物のようになることを良しとはされず、神さまが創られた全世界、そしていのちの息吹を吹き込まれ造られた人間を重んじられました。そのようなイエスさまの真意に気付かされた弟子たちは至るところでイエスさまの福音を宣べ伝え始めました。そして、その折には、何よりもイエスさまが共におられ、働いてくださっていると確信しました。であればこそ、それは弟子たちにとって大きな喜び、力付けになったことでしょう。

イエスさまは生きとし生けるもののいのちの営みの中に共におられ、時空を超えて今も働き続けていらっしゃいます。イエスさまは過去に封印された方ではなく、今も私たちと共に居てくださいます。

そして、もう一つ忘れてならないことは、私たちは洗礼に授かり、クリスチャンに、キリスト教徒になりましたが、同時に、イエスさまによって弟子とされたことを心に深く刻んでおきたいものです。それは、神さまが授けてくださったいのちへの奉仕のために、イエスさまと共に歩み、働く者となって欲しいというイエスさまからの願いであり、私たちへの信頼の証であることを感謝したいものです。

祈　り

私たちに尊い賜物としてのいのちを授けてくださる神さま、数々の不安、悲しみ、迷いの中に在っても常に共に居られ、イエスさまの弟子とされたことを感謝いたします。どうか、絶えざる聖霊の導きと促しによって、あなたの弟子とされた私たちを、あなたが創造され、授けてくださった尊いいのちへの仕え人に育ててください。殊に、いのちが様々な形で脅かされているこの世に在って、主による平和を実現するための器として私たちを遣わし、用いてください。主イエス・キリストのみ名によって。

アーメン

み言葉

花嫁を迎えるのは花婿だ。花婿の介添え人は立って耳を傾け、花婿の声を聞いて大いに喜ぶ。だから、私は喜びで満たされている。　　（ヨハネ 3：29）

B 年の降臨節第 3 主日に読まれる福音書は二つあります。その内の二つ目の福音書の結びに記されている洗礼者ヨハネの言葉です。

彼は荒れ野で叫ぶ者の声として、人びとに救い主が来られるための用意を整えさせるために遣わされました。そして、人びとに罪の悔い改めを宣べ伝え、ヨルダン川で悔い改めの洗礼を授けていました。

人びとは、もしや彼が約束の救い主ではないかと考えたのですが、彼はそれを否定し、あくまでも自分は「あの方の前に遣わされた者だ」と宣言します。

ヨハネは、人びとの目をただただ自分の後から来られる救い主に向けさせようとして、自分は花婿ではなく、花婿の介添え人に過ぎないと言います。そして、救い主が来られたときには、自らは消え去ってゆく存在であることを自覚してこう宣べているのです。

「あの方は必ず栄え、私は衰える。」と。

しかし、彼は大いなる喜びで満たされています。それは、自らの繁栄や栄光ではなく、救い主が本当に来られるという神の栄光の現れを自らの喜びとしているからです。

たとえ自らの存在が消え去ろうとも、神の栄光が現わされることを自らの最大の喜びとして、実際、彼は歴史から消え去っていきます。しかし、彼の働きは、どこまでも神を愛し神に仕えてその使命を全うした者として、聖書に記され、今も私たちの信仰のよき模範となっています。

彼がどこまでも自らの存在の拠り所としていたのは神であり、彼はその栄光が現わされることを何よりも願い求めていました。

そこに、神を愛する人の生き様をごいっしょに見出して参りたいと思います。

祈　り

私たちを造り、存在させてくださった父なる神さま、私たちがいつも神さまをその拠り所とし、自らの栄光ではなくあなたの栄光をひたすら求めていく心を与えてください。そして、あなたのみ心が行われることを最善の喜びとし、常にあなたを愛しあなたに仕えることができますように。

アーメン

み言葉

言は肉となって、私たちの間に宿った。私たちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。　（ヨハネ 1：14）

神の御子のご降誕とは、すべての人に誰一人残らず、それぞれにとっての「居場所」を与えられるための出来事でもありました。ヨハネによる福音書には、そのことの意味がはっきりと示されています。ヨハネによる福音書 1：14 にはこうあります。「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。」「言」とは神です。「肉」とは具体的にであるとか、日常的にであるといった意味です。また、「私たちの間」にとは、文字通り、私とあなたというつながりの間に、という意味です。すなわち、主なる神は、具体的な形で、日常的な形で、私とあなたの間に宿られているのだ、ということです。

そのイメージとは神の幕屋、天幕が私とあなたの間に張られるというものです。逆に言えば、私とあなたの間に祈り合う、互いに愛し合うつながりがなければ、そこには、神の幕屋は張られることはありません。私と、あなたがいて、そして、私とあなたが愛し合い、祈り合い、信頼し合うそのつながりの中に、神の幕屋、天幕が、確かに日常的に、具体的に張られる。その天幕こそが、すべての人にとっての「居場所」となるのです。

このヨハネによる福音書 1：14 は、実はヨハネ黙示録 21 章に記された「新しい天」と「新しい地」のヴィジョンとダイレクトにつながっています。

「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない」（ヨハネ黙示録 21：3、4）

私と、あなたがいて、そして、私とあなたが愛し合い、祈り合い、信頼し合うそのつながりの中に、神の幕屋が張られる。その天幕の中では、私たちの目の涙を、神さまがことごとくぬぐいとってくださる。あなたは一人ではない、あなたにはこんな居場所があるではないかと励ましてくださるのです。

祈　り

主なる神さま、私たちは、いつも自分の居場所を求めて生きています。もしも誰にも歓迎されず、自分の心安らぐ場所を見失ったならば、それは大きな痛みとなります。その痛みを一番知っておられるのは、主イエス・キリストにほかなりませんでした。主イエスが私たちのもとに来てくださったのは、すべての人に誰一人残らず、それぞれにとっての「居場所」を与えてくださるためでした。どうか、私たちがそのような主に信頼し、つき従い、日々を生きることができますように、どうぞ強め、導いてください。主のみ名によって。　アーメン

み言葉

私は「知恵ある者になろう」と口にした。だが、遠く及ばなかった。存在するものは遠く、深く、さらに深い。誰がそれを見いだせるのか。　　（コヘレト 7：23～24）

ドイツの神学者が獄中で書いた祈りがあります。

朝の祈り

神さま、朝早くあなたに向かってよびかけます。
私を助けて祈らしめ、思いをあなたに集めさせてください。
一人ではそれができないのです。
私のところは闇ですが、あなたのみそばには光があります。
私は孤独でありますが、あなたはお見捨てになりません。
私は臆しておりますが、あなたには助けがあります。
私は不安でありますが、みもとには平和があります。
私があなたの道を理解しなくても、あなたは私のための道をご存知です。（ボンヘッファー選集Ⅴ『抵抗と信従』）

私たちは自分に必要なものを神さまに求めます。獄中にいれば、解放をひたすら求めるのだと思いますが、彼は、神さまによって備えられる道が自分にとって望ましいかどうか分からないけれども、その道だけを求めています。

祈ることも神さまに思いを寄せることも自分だけではできない。できない自分の力不足を言うのではなく、支えてくださるのは神さまだ。だから「お支えください」と祈る。

私たちは、初めに挙げた 5 人の人たちよりも物事を知っているわけではなく、ただ、神さまとの関係で自分の小ささをよく理解しようとする者です。神さまはこの世界のさまざまなものを創り、そのために私たちにはうれしいことだけでなく、つらいこと、悲しいことも多くあります。でも、私たちにはそれぞれの道が備えられ、イエスさまによる救いの道も神様が創りだしてくださいました。

祈　り

主なる神様、いつも私たちをお支えくださりありがとうございます。私たちの前にはさまざまな道がありますが、あなたは私たちが進むべき道を備えてくださっています。どうかその道を私たちが確かに進むことができますようお導きください。そして何よりもあなたは、み子イエスによる救いの道を創り、私たちにお与えくださいました。私たちはその道からそれることが多くあるのだと思います。そのような時もどうかあなたの道に連れ戻してくださいますように。主イエス・キリストによってお願いいたします。　アーメン

み言葉

私は、他人の金銀や衣服を貪ったことはありません。ご存じのとおり、私はこの手で、私の必要のためにも、共にいた人々のためにも働いたのです。あなたがたもこのように労苦して弱い者を助けるように、また、主イエスご自身が『受けるよりは与えるほうが幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、私はいつも身をもって示してきました。」　（使徒言行録 20：33～35）

これはパウロが、エフェソにある教会の長老たちに語った惜別のメッセージの結びです。パウロは多くの試練に遭いながら、よく主イエスと人々に仕えました。彼は涙ながらに、人々に福音を語り続けました。パウロは深い愛情をエフェソの人々に注ぎ、人々もパウロを慕っていました。しかしこの時、パウロは愛する人々と別れ、迫害や捕われ人になることを覚悟して、エルサレムへ向かう決断をしました。それは聖霊の導きによるものでした。「あなたがたが皆もう二度と私の顔を見ることがないと、私は分かっています。」(同上 20:25)覚悟の旅が始まろうとしていました。

最後に、パウロは、長老たちに語りかけます。「受けるよりは与える方が幸いであると言われた主イエスのみ言葉を、いつも心に納めて歩むように」と。これと同じ主イエスのみ言葉は、福音書には出てきません。ルカ福音書 6 章 38 節に「与えなさい。そうすれば自分にも与えられる。」という主イエスのみ言葉が一番近いでしょうか。「与える」心を持つと、自分にも思いがけない恵みが返って来るというのです。神さまが祝福される道を歩むことになるのです。

「与える」、それは何よりも神さまの御心でありました。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」（ヨハネ福音書 3：16a）神さまは、この世を、何より私たちを愛され、独り子をお与えになりました。そして、誰よりも独り子主イエスが、「与える」人生を歩まれたのです。十字架上にご自分の命をささげるまで、この地上の命を愛されました。

私たちは、新型コロナウイルス禍の下、人間がいかに弱い者であるかを痛感し、互いに思いやる心がどれほど大切であるかを学びました。しかし、どうしたことでしょうか。世界は「自分こそが」「自分の国こそが」の声が溢れ、尊い命がないがしろにされ、奪われ、追放され、立ち退かされ、身を寄せる所もない無数の人々がいます。私たちは、「与える」という神の御心、主イエスのご生涯に立ち返りましょう。

「あなたがたは、私が飢えていたときに食べさせ、喉が渇いていたときに飲ませ、よそ者であったときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに世話をし、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。」「よく言っておく。この最も小さい者の一人にしたのは、すなわち、私にしたのである。」（マタイ 25：35～36、40b）

祈　り

神さま、あなたはすべての人に命の息と、自然や食べ物をはじめ私たちに必要なすべてのものを、そして何よりも、独り子主イエスをお与え下さいました。どうか私たちが神さまの御心と主イエスのご生涯に倣い、「与える心」をいつも心に納めて歩むことができますように、お導き下さい。主イエス・キリストによってお祈りいたします。

アーメン

6日目 – 私たちと共に歩む　5月14日

み言葉

一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、祝福して裂き、二人にお渡しになった。すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。

（ルカ 24：30～31）

復活日の夕方、二人の弟子がイエス様の出来事を話しながらエルサレムから約 10 キロ離れたエマオという村に向かって歩いていました。そこへ復活されたイエス様が近づいて来て一緒に歩かれます。しかし、二人の目は遮られていて、イエス様だとは分かりませんでした。そこから二人とイエス様の対話が始まります。

二人は暗い顔をして、自分たちがいかにイエス様に望みをかけていたか、それなのに人々はイエス様を十字架にかけて殺したこと、しかし、仲間の女たちが三日目にお墓に行くとイエス様の遺体はなく、天使たちが現れ、「イエスは生きておられる」と告げたと伝えます。

するとイエス様は、二人がメシアは、これらの苦しみを受けて栄光に入るといった預言者たちの語ったことを信じられないことを指摘され、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたりご自分について書いてあることを解き明かされました。そのお話が沈んだ二人の心を

燃やしたのでしょう。目指す村に近づきイエス様は、なお先へ行こうとされますが、二人が「一緒にお泊りください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いています」と言って、無理に引き止めたので、イエス様も共に泊まるために家に入られます。そして不思議なことに、二人が自分たちの心を燃やしてくれた旅人に主人の役割・パンの祝福を委ねた時に彼らの目が開き、その旅人が復活されたイエス様だと分かった、というのです。

　イエス様のことを人生の参考人かアドバイザーとして、話を聞いている間は、一緒にいてくださっても分からない。自分の人生の主人として心にお迎えした時に初めて復活されたイエス様とお会いできる、ということなのです。

祈　り

エマオへの道で、心が沈んでいた二人の弟子と共に歩まれた主よ、どうかあなたを人生の参考人かアドバイザーのようにではなく、私がお仕えする主人として私の心にお迎えすることが出来ますように。そして、二人の心を喜びで燃え上がらせたように、わたしにもあなたのお話を語ってくださり、私の心にもあなたが共にいてくださる喜びを燃え上がらせてください。イエス様のみ名によってお願いいたします。　アーメン

み言葉

「今日、あなたがたが神の声を聞くなら、心をかたくなにしてはならない。」　（ヘブライ 4：7b）

聖書には「聞く」という言葉が本当に多く出てきます。旧約聖書では神が直接に、あるいは預言者を通して人々に語りかけ、聞くようにと促します。イエスも人々に神の国を語り、「聞く耳のある者は聞きなさい」と繰り返し言われます。冒頭の聖句は詩編 95 編からの引用です。エジプトを出たイスラエルの民が、モーセに飲み水を求めて、神を試し（マサ）、試みた（メリバ）ことを覚え、同じ過ちを犯さないようにと教える詩編です。ヘブライ人への手紙の著者も、この言葉を三度も引用して信仰から離れることのないようにと警告しています。

神の声を聞いて素直に従う者もいますが、旧約聖書でも、新約聖書でも聞くことができない場合が多いように思います。それでも神は何度も何度も、繰り返し語りかけてくださり、決してあきらめることはありません。語り続けてくださいます。

日常生活の中でも他者の話しを聴くことは決して簡単ではありません。わたし自身もよく連れ合いに「最後まで聞いて」と言われるのですが、途中で遮って自分の意見を

話しだすこともあります。思い込みや偏見が相手の想いを受け止めることを邪魔してしまいます。他のことが気になって聞くことに集中できないこともあります。心を空っぽにしてじっくり相手に向かい合うことが大切です。

神の声を聞く時にはなおさらでしょう。聖書の言葉を通して、礼拝を通して、祈りを通して、他者や出来事を通してわたしたち一人ひとりに語りかけてくださる神の声を聴くことができるように、心を整えたいものです。それが他者の声を聴くことにもつながっていくでしょう。いつもできないかもしれませんが、少しでも聴くことができるようになりたいと思っています。

祈　り

命と愛の源である神よ、あなたがいつもわたしたちを見守り、導いてくださることを覚えて感謝いたします。あなたはわたしたちを信仰によって救い、永遠の命を与え、また福音を宣べ伝える者としてくださいました。あなたから託された尊い務めを果たすために、わたしたちが常にあなたのみ声に聞き従うことができるようにお導きください。主イエス・キリストによってお願いいたします。

アーメン

み言葉

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。御子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。

（ヨハネ 3：17）

新約聖書は救い主キリストについて記された書物です。上記の聖句は小聖書と呼ばれます。神がキリストをこの世に送られたのは、私たち人類を愛しているから、あなたを“救う”ためだと述べます。これが神の救済です。

神は創造の時、人を神の似姿に造られ、全ての物を“良し”とされました。しかし、蛇から「神のようになれる」と誘惑された人間は知恵の実を食べてしまいました。人は益々神のようになろうと、知恵や知識、力や富、権力、地位や名誉などを求める者となりました。神以外に心を向けることは罪です。でも人々は、それらを得て自分の欲を満たすため懸命に働き、日夜努力を続けています。それらを手に入れるため、あらゆる手段や方法で、競争や争いを繰り返しています。生き抜くために争い、奪い合い、勝つためには、嘘を吐き、時には騙し、騙される、そんな日々が日常的に繰り広げられています。

このような社会はストレスを生み、家庭、学校、職場で多くの問題を発症させています。経済、病気、老い、

貧困、暴力、虐待、虐めなどなどです。根底にあるのは人間関係の破綻、愛の欠如です。パウロは異言や預言、神秘や知識、完全な信仰を持ち、全財産を施し、他者のため自分の身を死に引き渡そうとも“愛がなければ”無に等しいと教えます。

人は自分で自分を救うことはできません。人は弱く欠点と短所だらけだからです。自分で自分を救うためには、強靭の心と体が必要です。この肉の体は老いて滅んでいくものです。誰一人として、心の思いに体を従わせるような強靭な心と体を持つことはできません。人間は脆いのです。そんな人間を愛している、神が被造物を愛している、これがすべての出発点です。

キリストが肉となりこの世に来られたのは、人間の罪を赦し、贖い、神の子とし、神との愛を回復するためでした。キリストは十字架に掛かり、命を与えられました。これが福音です。神の愛です。“神があなたを愛している”、これが救済の出来事、神の“救い”です。

祈　り

主イエスさま、あなたは私たちを罪のために十字架に掛かり、罪を赦し、救いへと招いて下さいました。どうか、あなたに愛され、罪が赦されている者として、わたしたちも隣人を愛し、赦す者となり、あなたの愛を人々に伝える者としてください。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。　アーメン

み言葉

あなたがたに会いたいと切に望むのは、霊の賜物をあなたがたに幾らかでも分け与えて、力づけたいからです。というよりも、あなたがたのところで、お互いに持っている信仰によって、共に励まし合いたいのです。

（ローマ1：11～12）

まことの励ましは神からのみ与えられます。慰めの言葉として、あるいは教え諭す言葉として、その言葉を実行していくみ業として、また静かな愛の眼差しとして、人間に向けられ、その人を支え、その人を律し、その人を奮い立たせ、その人を歩み出させます。まことの励ましは、耐える力を失って弱っている人へ、嘆き悲しむ人へ、神に服従しようとこの世でもがいているキリストの弟子たちへ注がれ、神を求める声を沈黙の中に聴き、生きる力を呼び戻し、その人を神へと近づけます。

この励ましは神から人へ、そして人から人へと伝播します。また人を、祝福を与える者へ、世界中にみ子の福音を語り伝える者へと変革させていきます。それによって人は自らのためだけではなく、神と人への徹底的な奉仕へと、人間が相互に助け合う関係を築く和解の道筋へと導かれます。神からの励ましは人をその苦しみから解き放って

自らの使命に呼び戻し、またかつて預言者が信仰共同体へ向かって語りかけたように、教会を正しい方向へと作り上げていきます。

　この恵みに生きる時、この地上の困難さや不正義の只中にあっても、わたしたちは愛と和解の神による平和の実現への希望を持ち続けることができます。まことの神からの励ましによって人は生きる方向性を示され、人に会いたいと願い、連帯のうちに神のみ国の実現のために他者とともに生きるものとなっていきます。

祈　り

この世に生きるものを結び合わせてくださる神よ、あなたの励ましをこの世界に住むすべての人びとに注いでください。沈黙の中で、み言葉によって、人の顔を通して、またこの世界へのあなたのみ業によって。ことに力を失っている人、悲しみに打ちひしがれている人にあなたの励ましを与え、生きる力を取り戻させてください。また神の子であるわたしたちを整え、果たすべき使命へと教会をお導きください。主イエス・キリストによってお願いいたします。　アーメン。

み言葉

エルサレムには羊の門のそばに、ヘブライ語で「ベトザタ」と呼ばれる池があり、そこには五つの回廊があった。さて、そこに三十八年も病気で苦しんでいる人がいた。イエスは、その人が横たわっているのを見、また、もう長い間病気であるのを知って、「良くなりたいか」と言われた。病人は答えた。「主よ、水が動くとき、私を池の中に入れてくれる人がいません。私が行く間に、ほかの人が先に降りてしまうのです。」イエスは言われた。「起きて、床を担いで歩きなさい。」すると、その人はすぐに良くなって、床を担いで歩きだした。　（ヨハネ５：2、5～9a）

長患いで床に就いていると、あれこれ心配ばかりしてしまいます。病気の時は心細いものです。悪いほうに悪いほうにばかり考えてしまいがちです。その上、私がこうなのは誰かのせいにしたり、私には独りぼっちで手助けしてくれる人がいないと嘆き、投げやりになってしまったりします。

そんな人にイエス様は聞かれるのです。心底、心の奥深くでどう思っているのか尋ねるのです。「良くなりたいか」。その人があれこれ言い訳をしたとしても、「起きて、床を担いで歩きなさい」と、大きくて念力が込められていて背中を押し上げるような勢いある音声で、病人を突き動か

すのです。

　その人は自分の病気をしっかりと受け止めて背負って生きなければならないのです。病気がなくなるのでもない、誰かが代わりに引き受けてもくれません。自分の床は自分で担いで歩くしかないのです。

　天から聞こえてくる言葉によってそうだと分かったならば、自分の足で歩んで行けるのです。その人は「良く」なって、すなわち魂が健康、健全になって自分の人生を本当の意味で生きていくようになるのです。イエス様からお声を掛けられて、目覚めた人に生まれ変わります。ここに身心の癒しがあります。

　神様はイエス様の言葉を通して、人に力を与えられます。人に自分の足で立ち上がる力を与えられます。この物語を知らされている私たちは、今も聖霊の声として「起きて、床を担いで歩きなさい」の励ましを受けているのです。

祈　り

慈悲深く、慰めのもとである神様、私たちがさまざまな困難のうちに悩み、苦しみ、光を失っているとき、あなたのほかに助け主はいません。どうか、私たちのそばにいてくださり、あなたのお声を聞かせ、私たちを癒し、生きる力と希望を与えて歩んで行くことができるようにしてください。憐れみ深い主よ、み子イエス・キリストによってお願いいたします。　アーメン

み言葉

天を創造し、これを延べ、地とそこから生ずるものを広げ、その上に住む民に息を与え、その中を歩む者に霊を授けられる方、主である神はこう言われる。主である私は義をもってあなたを呼び、あなたの手を取り、あなたを守り、あなたを民の契約とし、諸国民の光とした。目の見えない人の目を開き、捕らわれ人を牢獄から、闇に住む者を獄屋から連れ出すためである。私は主、これが私の名。

（イザヤ 42：5～8a）

私たちは、その鼻に命の息を吹き込まれて生きるものとなり（創世記 2：7)、人間は「霊と心と体」(Ⅰテサ 5：23b)という三つの要素からできていると聖書では理解されています。

「炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、霊が語らせるままに、他国の言葉で話しだした。(使 2：3～4)」というのが聖霊降臨の出来事ですが、その目的の一つとして、「目の見えない人の目を開き、捕らわれ人を牢獄から、闇に住む者を獄屋から連れ出すためである。(イザヤ 42：7)」が挙げられます。

私たちは、コロナ禍によって人との距離を置くことの寂しさを経験し、ウクライナやガザでの悲しい戦争を目の当たりにし、様々な危機を経験しながら、目を背けてきた

ことやより困難の内にある人々への慈しみの眼差しを意識するようになりました。傷つき、暗い気持ちを抱く捕らわれの身だった人たちに、もうすぐそこから解放されるという希望の預言をイザヤは語ります。戦火や災害によって、生活が破壊され、自由を失い、多くの命が奪われ、神さまは本当におられるのだろうか、何を拠り所にすればよいのかという不安を抱く私たちですが、その心の奥底には、神さまの息である聖霊が与えられているのだから、世界に公正をもたらす神さまのみ言葉に信頼するようにという呼びかけです。

聖霊に働きによって、わたしたちがキリストの死と復活にあずかり、新しく生まれるために洗礼を受け、聖餐を守り続けています。この信頼と希望の営みを一人でも多くの方と共にできますようにと、祈り、行動し続けてまいりましょう。

祈　り

私たちにいのちの息を授け、愛してくださる神さま、様々な困難に直面する私たちに、聖霊の働きを思い起こさせ、慈しみの心を豊かに増し加えてくださることを感謝いたします。主の僕として、キリストの歩まれた道を、宣教の指標として生きるものとならせてください。あなたが創造されたあらゆるいのちに仕え、主による平和を実現するための器として、私たちを用いてくださいますように。平和の君、主イエス・キリストのみ名によってお願いいたします。　アーメン

おわりに

一昨年の夏、英国カンタベリーで第 15 回ランベス会議が開催されました。その最終日にジャスティン・ウエルビー カンタベリー大主教が、「宣教の五指標」を骨子に第 3（最終）主題講演をされました。その中で、「語ること（Tell）：神の国のよき知らせを宣言すること」の説明に「より深く成長し、数を増やしている多くの教会の強みは、誰もが福音を知り、イエス・キリストとの愛と出会いについて自らの証しを語ることができるということです。彼らは雄弁ではないかもしれません。神学はやや粗雑かもしれません。しかし、彼らが心から語る時、他の人々は耳を傾けるのです。そして、彼らの変えられた人生そのものが、その言葉を物語るのです。」とお話され、また「すべて聖公会に連なる者たちが、自分たちが証し人であることを知り、礼拝につながるようにいたしましょう。彼らこそが、教会の健全さの基礎となるからです。私たちは、福音を解き明かすための方法を教えるシンプルで有用なコースを持っているでしょうか。」とも問われています。

「み国が来ますように」の目的は、5 名の方の導きを祈ると共に、私たちがイエスさまとの交わりを深め、イエスさまの証人として成長していくことです。そのために何が必要なのでしょうか。ある教役者は、祈祷書の中にある「教会問答」を学び直すことから始めなければならないのではないか、と語っていました。私がイエスさまの証人になることを信仰生活の目的に定めることから全ては始まるのではないでしょうか。

※ 聖書は、『聖書 聖書協会共同訳』を使用しました。

NIPPON SEI-KO-KAI